



155号

2010/7 /1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’  
東京都町田市能ヶ谷町1521-58 田井方  
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100  
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>  
Eメール:[wanli@jcom.home.ne.jp](mailto:wanli@jcom.home.ne.jp)



〈孤児院の子供たちがアプサラダンスの歓迎の踊りを披露してくれた〉(関連記事12p)  
カンボジア王国バンテアイミエンチェイ洲ツールボンロー村 2009年9月7日 撮影:川口洋一

‘わんりい’ 155号の主な目次

私の調べた四字熟語(44)「勿頸頸之友」……………	2
アジアを読む(68)「神の子ども達はみな踊る」 ……	3
媛媛讲故事(25)「八仙の伝説Ⅴ・韓湘子」……………	4
松本杏花さんの俳句集・「余情残心」より……………	5
北京雑感(46)「北京市生活地図冊」……………	6
土の香りのモダンアート・農民画(11)「愛水護水」…	7
フィールドノートの走り書き(2)毛おじさん……………	8
7月の歌・歌詞「一剪梅」……………	10
【活動報告】あさおサークル祭……………	11
カンボジアの村の暮らし(3)……………	12
スリランカ紹介(40)「スリランカの世界遺産Ⅳ」…	14
私の四川省 一人旅(37) 垂丁 23……………	16
アフリカとの出会い(44)「アフリカンフェスタ」…	19
‘わんりい’ 掲示板……………	20

♪♪「中国語で歌おう!会」7月の歌♪♪

中国でも台湾でも人気だったテレビドラマ挿入歌

〈一剪梅〉(歌詞10p)

娃娃:詞 陳怡:曲

於:まちだ中央公民館7F・第一音楽室

JR 横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩2分、  
小田急線南口徒歩5分、町田東急裏109ファッションビル7F

7月9日(金) 19:00~20:30

指導:趙鳳英(中国人歌手)

録音機をお持ちの方はご持参下さい。

●参加費:1500円(体験無料)

●「中国語で歌おう!会」8月の講座は、講師の趙鳳英さんの帰国により中止にいたします。今後につきましては、事務局(☎042-734-5100)へお問合せ下さい。

随分昔の話になりますが、「昭和の政商」といわれた、国際興業社主・小佐野賢治(故人)と元首相・田中角栄(故人)との二人三脚の関係は“刎頸の友”の間柄としてあまりにも有名でした。田中角栄が総裁になるための軍資金(50億とも60億ともいわれる)を小佐野賢治が準備したと言われています。

私は“刎頸の友”ということばをこの時初めて耳にしました。今回はそのことばの由来を調べてみます。

辞書を調べてみますと、日本と

中国では若干言い回しが異なりますがそれぞれ次ぎのように載っています。

▲三省堂 現代国語辞典：

「刎頸之友 ふんけいの交わりを結んだ友人。ふんけいの交わり：その友人のためなら、首をねられても悔いない、というほどの深いつきあい。」

▲小学館 中日辞典：

「wén jǐng zhī jiāo 刎頸之交 刎頸の交わり、生死を共にするほどの友人」

この成語の出自は、「史記(第32回、流言飛語の注記参照)・廉頗、藺相如列伝」です。

中国の戦国時代のお話です。趙国は強国の秦に何時侵攻されるかも分からない状況にありましたが、とりあえず表向きは互いに友好を保っていました。そのような折に秦国から趙国が持っている稀代の至宝「和氏の璧(玉)」と秦の15の城と交換しないかという提案がありました。

しかし、秦国がそのような取引を実際にする筈はなく、璧だけを取られてしまうだろうと分かっていたので、趙王が困っていると、当時食客として仕えていた頭脳明晰で弁舌に優れた藺相如という者が「私に考えがあるので、私が行ってきましょう」と言って璧を携えて秦国に行き、秦王と会いました。そして秦王に璧を渡したのですが、案の定一向に交換を約束したはずの15の城をくれる様子がない

ので、藺相如はその才知の限りを尽くして何とか璧を取り戻し、趙国に無事に持って帰りました。喜んだ趙王は藺相如を大夫に任じました。<sup>注)</sup>

その後、再び秦国から灑池(現河南省灑池県)で、両国の友好を祝おうという招きがありました。やはりこれも小国の弱みで断ることができず趙王は渋々受諾し、この時も藺相如を連れて灑池に行きました。

秦王はその祝いの席での儀式に、趙王に秦国のしきたりを強要して、趙王を臣下扱いして見下そうとしましたが、藺相如が機転と巧みな弁舌でその場を切り抜け無事に趙国に帰ることが出来たのです。

この功績により藺相如は上卿(大臣級の官職)に任命されました。

一方歴戦を勝利に導いた勇将・廉頗は、藺相如の異例の出世を大変妬みました。廉頗は文字通り身体を張って秦の侵攻を自分の力で防いだ実績と自負がありました。藺相如が口先によるだけの功績で自分よりも上の地位になったことに我慢がならず、「藺相如の奴め、いつか会ったら必ず辱めてやる」と、周囲にも不満を漏らしていました。藺相如はそのことを知ってからは廉頗とはなるべく顔が合わないよう避けていました。

藺相如の従者たちはこれを知って彼に言いました。

「我々があなたに仕えているのは、あなたを高尚な君子と慕っているからです。それなのに最近のあなたはこそと廉頗から逃げ回ってばかりで、そのような行動をとるあなたを見ていることにはもう耐えられません」。

これを聞いて藺相如は大笑いして「私は秦王さえ恐れていないのだ。それなのにどうして廉頗を恐れる必要があるのか。それどころか廉將軍と私とはともに趙王の片腕だと思っているのだ。思うに秦が趙を攻めきれていないのは、廉將軍と私が健在だからこそで、もし二人が争ったりしたら、これこそ秦の思ふ壺である。私がこのような行動をとるのは、国家の危急を第一に考えているからのことだ」と言いました。

廉頗と藺相如はともに趙に不可欠な人材であり、それが争っては強国・秦に乗じる隙を作り、どちらかが失脚すればその侵攻を防げなくなる。藺相如が

恐れるのは二人が会うことで亀裂が決定的になることであり、国の安定のために自らの面子を犠牲にしたということでした。従者たちはその深い思慮と器量に深く感じ入り、頭を下げたのでした。

このことを耳にした廉頗は非常に恥じ入り、直ちに藺相如のところへ行って、心から謝罪をしました。これに対し藺相如は「何と仰せられますか。将軍がおいでになるからこそ趙国ですよ」と快くこれを赦したので、ますます心を打たれた廉頗は「私は貴方のためならこの頸を刎ねられても悔いはありません」と誓い、藺相如も「私も将軍のためなら喜んで頸を刎ねられましょう」と誓ったのです。



挿絵：叶霖<sup>イェリン</sup>

■注

璧は、平らで中央に穴のあいた宝玉で、完璧は、この宝玉に全く欠点がないの意。上記の故事にあるように、藺相如が、命がけで守って趙へ持ち帰ったこと(完璧帰趙)に由来する。

(小学館 中日辞典)

アジアを読む(68)

神の子どもたちはみな踊る

村上春樹 著  
新潮文庫

失恋した後輩が読んでいた本である。

今は奥さんも子どももいる後輩くんが失恋したのは、10年ほど前のことだが、先日、時間つぶしに寄った本屋で、未だにその文庫本を平積みしていた。(後輩くんが読んでいたのはおそらく単行本だったのだろう)著者が有名なベストセラー作家だから、ということもあるのだろうけど、ちょっとすごいな、と思う。で、手にとってしまった。

勝手に一言でまとめてしまえば、「静かな絶望」のなかの「誰か」を書いた6編。短編の横軸を「静かな絶望」が貫いている。後輩くんが失恋したときにこれを読んだのは正解だったのかも。「いま、僕、本なんて読んでいますよ。『神の子どもたちはみな踊る』っていう本です」と電話で話した彼の声を、久しぶりに思い出す。

私たちはゆるゆると落ちていっているのかもな、と思うことがある。それは例えば、増えつづける国債をどうしようもできていないなかで、このまま破綻に向

かってるんじゃない? とか。「エコ」「エコ」と声高に叫ばれているけど、温暖化は止まらず、環境は汚染されつづけていることとか。誰かがこれを「ヌルい失望」と呼んで、だから、ゆるゆると落ち続けるだけなんだと言っていたが、そんな現状を小説にしたらこの一冊になるんだろう。

この短編集の最後の小説では、主人公が、静かな絶望のなかで愛する人を守ろうと決意して終わる。もしかしたら、これも「ヌルい失望」を前にしての「ヌルい解決策」かもしれない。けれど、これも現状打開の一歩だと思いたい。

現在、転職を重ねて私は、子育てをサポートする職場で働いている。ボランティアやNPOの方と接する

ことが多いが、みなさんのモチベーションは、大雑把にくくって「子どもたちが大人になったときのよりよい社会」だ。端的に言って、「愛する人を守りたい」という気持ちから、すべては始まっている。

(真中智子)



八仙人の中で、笛を携えているのが韓湘子という仙人です。

言い伝え

では、韓湘子の師匠は呂洞賓<sup>ろどうひん</sup>ともいわれています。実は、韓湘子は本来は人間ではなく、洞窟で修行を続けていた仙人達の前にいつもいた鶴でした。

洞窟で仙人達が話しているのを聞いているうちに色々なことを悟るようになりましたが、鶴であるため仙人になることはできませんでした。ある時、既に仙人になっていた呂洞賓は悟性の高い白鶴が洞窟にいると伝え聞きました。そして、この白鶴のいるところに来てと羽を脱ぎ去る術を白鶴に教え、その方法によって鶴は河南省孟県にある韓家に人間として生まれ変わり、湘と名付けられました。

韓湘は幼い時に両親を失い、父親の叔父にあたる人(叔祖父)に育てられました。その叔祖父は唐の大文人として知られた詩人である韓愈<sup>かんゆ</sup> 1)だと云われています。韓湘子と韓湘とが同じ人物

であるかどうかということは歴史的に論争されていますが、一般的には、韓湘子は韓愈の甥の息子であるといわれており、様々な歴史書にも韓愈は確かに韓湘という甥の子どもを育て、その子は役人として仕事をしていたと述べられています。

唐代末の小説《西陽雜俎》<sup>2)</sup>によると、韓愈の、この甥の息子・韓湘は大変な変わり者で、すべての束縛を嫌うばかりか、読書もせず、出世には無関心、美女にも全く興味を持たず、お酒を飲んで、ひたすら道術の訓練に耽っていたということです。

20歳ごろふらりと何処かへ遊びに行っただけ、行方不明になってしまっていたのですが、それから20年

後、突然ぼろぼろの身なりで長安の街に姿を現わしました。

韓愈はこの甥の息子を深く心配して学校に行かせ、読書をするように勧めましたが全く耳を貸さず、賭け事をしたり、お酒を飲んだりしているばかりでした。遂に韓愈は怒って、

「こんなでたらめの生活を続けていたらお前の将来はどうなると思うのだ」

と言うと、

「叔祖父はご存知ではないが私には私しかできないこともある」

と答えました。韓愈が

「では、お前は何かができる？」

と訊きますと、

「私は牡丹の苗を植え、叔祖父のお好きな色の牡丹の花を七日間で全部咲かせることができる」

と答えました。

季節は真冬で、韓愈はとても信じられませんでした。韓湘が植えた牡丹の木は七日を経ると、なんと、本当に色とりどりに鮮やかな牡丹を咲かせたではありま

せんか。更に不思議なことに、花びらに「雲横秦嶺家何在 雪擁藍関馬不前」という対句が書かれてありました。韓愈がその意味を尋ねると、韓湘子は「後日分かるでしょう」と答えたそうです。

その後歳月は流れて行きました。当時、朝廷の役人だった韓愈は、或る時皇帝に諫言を呈して皇帝の機嫌を損ね、長安から遥か遠い広東へ流されることになりました。が、その途中大雪になって前に全く進めなくなってしまいました。

するとそこへ突然、韓湘子が見送りに現れて言いました。

「以前自分が咲かせたボタンの花びらに書かれて



いた言葉の通りになってしまった」。

その言葉を聞いた韓愈は、その地の名前を訊ねてみますと果たして藍関という地名でしたので、韓愈はその対句を織り込んだ詩を作り韓湘子に贈りました。その詩が今も有名な《左遷至藍関示姪孫湘》という詩です。

一封朝奏九重天 夕貶潮州路八千  
 欲為聖明除弊事 肯將衰朽惜殘年  
 雲橫秦嶺家何在 雪擁藍関馬不前  
 知汝遠來應有意 好取吾骨瘴江邊

(訳：朝に上奏文を天子様に奉った。すると、夕べには長安から八千里も離れた潮州に流されることになった／天子様のために悪弊を除きたいと思えばこそで、衰えはてた身を今更惜しもうとは思わぬ／雲は秦嶺山脈にたなびき私の家はどこにあるのだろう。雪は藍田関を埋めつくして私の馬は進まない／おまえが遙々やって来たのは、何かの心づもりがあるのか。それなら大川の瘴気を受けることになる私をなんとかしてくれるがよい)。

韓湘子は韓愈に目的地まで一緒に行くと、別れる際に一粒の薬を韓愈に渡し「この薬を飲めば、瘴気を防ぐことが出来るでしょう」と言って姿を消してしまいました。

韓湘子は仙人になると叔祖父を道教の道へ導きたいと色々勧めました。しかし韓愈は結局生涯官職に付いたまま浮沈を繰り返し、亡くなるまで朝廷に仕えました。

(続く)

■注記

1) 韓愈 (かんゆ) : 792年進士に及第し、その後、監察御史、中書舍人、吏部侍郎(この官によって「韓吏部」ともよばれる)、京兆尹などの官を歴任した。古文復興運動を主導すると共に、中国古来の儒教の地位の回復を提唱した。詩人としては、新奇な語句を多用する難解な詩風が特徴で、平易で通俗的な詩風を特徴とする白居易に対抗する中唐詩壇の一派を形成した。

2) 酉陽雜俎 (ゆうようざっそ) : 中国・唐代の荒唐無稽な怪異記事を集録した書物。撰者は段成式。書名の「酉陽」は、湖南省にある小西山の麓に、書1,000巻を秘蔵した穴が存在するという伝承に則っている。内容は、神仙や仏菩薩、人鬼より、怪奇な事件や事物、風俗、さらには動植物に及ぶ諸事万般にわたって、異事を記している。

注1), 2)ともウィディペキアより

松本杏花さんの俳句「余情残心」より

追憶や蛍の匂い指を透き

tóng qù dāng zhuī yì  
 童趣当追忆

nán wǔ yíng huǒ chóng qì xī  
 难捂萤火虫气息

shǒu zhǐ wèn liú yì  
 手指问流溢



季语：萤火虫、夏。

赏析：我国唐代诗人白居易《放言五首》其一咏白：“草萤有耀终非火、荷露虽团岂是珠！”是呵！孩童就因为“有耀终非火”、才敢用手捂、但萤火虫的草腥气味却透过手指溢飘出来。这、便是童年时代的乐趣。如今又到盛夏、追忆似水年华、不禁感慨万千。

空蝉や葉ずれの音に風を聞く

chán tuì hé xī kōng xū kōng  
 蝉蜕何徯孔虚空

cuì yè qīng wǔ shā shā shēng  
 翠叶轻舞沙沙声

yōu rán tīng liáng fēng  
 悠然听凉风

季语：蝉蜕、夏。

赏析：写蝉的好俳句不少。此句却与众不同：以视觉起兴、以听觉收尾。象征着空虚、令人假想翻翻。作者用沙沙的树叶摩查擦声表现风的强弱、笔触轻灵、给人一种心旷神怡的感觉。

初めて北京へ行った時、地下鉄「前門」駅の階段を上ると、手に思い思いの品物を持った人々が、我々の周りに寄って来て、「買え、買え」と言うのにビックリしました。品物は帽子だったり、絵葉書だったり、五星紅旗だったり、中には竹の弾性を利用した、木登り猿のおもちゃもありましたが、一番多かったのは、「北京市街地図」を売っている人でした。こんな光景も、「今は昔」となってしまう、チョッと寂しく感じています。

友人の案内で歩く市内見物でしたが、地図はあったほうが良いと思い、1部買いました。その時の値段は、確か1元、あるいは半分の5角だったかも知れません。もう忘れてしまいましたが、随分安かったことだけは覚えています。それから2、3年して、北京で生活していた私の処へ、日本から友人が遊びに来て、一緒に市内を歩いていて、あの地図を買おうと、もう3元になっていました。他の物価と比べると、随分大幅な値上げです。

次の年に、別の友人が来て、又地図を買いました。「いくら？」と聞くと、4元とのこと。高いと思って、「あちらでは3円で売っていた」とカマをかけると、「それじゃ、3元でもいい」と売ってくれました。「何だ、まけられるのだ。」と気をよくして、家に帰ってよく見ると、「2004年版」とかいてありました。2年も前の地図だったのです。古いものを売りつけられて、悔しいと思いましたが、考えてみれば、値切らなかつたら、古い版を4元で買わされたのですから、それよりは良かった、と考えることにしました。

それ以後、地図やさんに声をかけられると、「いくら？」と聞くことにしました。それからは「4元」が多くて、時折、「安くして」と言うのと、「今年の版だからダメ」言われました。時々、「3元」とか「2円で良い」と言う人がいますが、「この人の売っているのは、古い版の地図だ」と分かるようになりました。

この種の地図は、旅行者には便利ですが、長く滞在するとなると、大まか過ぎでチョッと不便です。それで、友人から勧められて使うようになったのが、「北京生活地図冊」と言う地図帳です。名前は版元によって少しずつ違いますが、共通項は、「生活」という文字が入っていることです。地図には目印になるような大きな商店やデパート・スーパーなどが記載され、バス停の情報も載っています。バスの路線や、停留所も詳しいので、目的地の最寄停留所を探したり、どの路線を使いどこで乗り換えるかを調べたりと、毎日便利に使っていました。

しかし、この地図、2006年頃から、本屋さんで見かけなくなりました。当時は、北京市内はあちこち大規模な工事をし

ていて、新しい路ができたり、それに連れてバスのルートが変わったりするので、地図の最新版を欲しいと思い、あちこち本屋さん寄って見るのですが、殆ど見かけなくなりました。新版は勿論、古い版の地図帳も見かけなくなりました。これは私の勝手な想像ですが、出版社は、北京の改造が終わるまで新しい地図帳を出版しないことにしたようです。

確かに、地図を作る傍から新しい路や広場が出来たのでは、正しい地図にはなりませんから、工事が落着くまで待つほうが賢明でしょう。きっと今頃は、北京オリンピックで大きく変わった北京市街地の新しい生活地図帳が出来ていることでしょう。次回北京へ行った時には、是非一冊買ってみようと思っています。

このようにお話しすると、この地図、とても正確なのだろうと想像なさるでしょうが、実際は違います。地図上の位置と実際の位置が違っているところを随分見つけました。好意的に考えれば、北京市街の大改造に地図が追いつかなかつたのだと言えますが、私が実際に遭遇した違いは、それでは片付けられない種類のものでした。

私が住んでいたのは、西側が西三環に接したブロックです。家の近くに細い道があって、小さいお店や食堂が並んでいて、毎日利用していたのですが、この道が地図上にはありません。別の道があるようなので、時間のある時に、遠い方からその道に入って歩いてみました。地図に依ると真っ直ぐな抜け道のはずなのに、暫く行くと正面に店が見えて来てどうやら行き止まりのようです。見届けようと更に歩いてゆくと、何と、路がクランク状に曲がっていたのです。そして更に歩くと、その先にいつも利用していた商店街がありました。つまり、地図上では真っ直ぐに書いてある路が、実は途中で直角に曲がり、更にねじれていたのです。いつも行く商店街が地図上の路と一致しなかったのです。

またある時、北京西駅近くの蓮花池公園に行き、バスの停留所に近い西門から入ろうと、歩いたのですが、西門はありません。近くの人に聴くと、西門はこの路には無く、もう一本裏の道に面しているのです。

直線で描いてあった路は直角に曲がり、公園の門が面する路が一本省略されていたのです。この二つの違いは、どちらも昔からの地域でのことですから、地図が違っているのは明らかです。

この経験から、北京の地図をあまり信用しなくなりましたが、新しく発行された地図は訂正されて、正しくなっているのだろうと、期待しながら新しい地図が買える日を心待ちにしています。

長らく地球を離れていた野口聡一さんが、宇宙から帰還したあと地球についてしみじみ語っていましたね。

「流れる水があること、それはとてもありがたく素晴らしいことです。」

その言葉が印象的だったせいか、農民画の画集をパラパラと眺めていたら、ふとこの絵に目が留まりました。

川面に浮かぶ緑がゆらゆらと躍っているように見えました。川に浮いている藻などをさらって清掃している絵なのだと、何気なく見慣れていましたが、お陰で特別にハッピーな一枚に思えてきました。

「水を大切に」という題目の脇にはサブタイトルがついています。“水は生命の源泉。水は万物の母”。

そんなふうにな水を讃えているわりに、絵の中の川は非常に平べったく色紙をジョキジョキ切って貼り付けたようなあしらいを受けていますね。太鼓橋や小舟がしっかりと存在感があるのに何とも対称的です。このへんの朴とつさが見るものをほっとさ



「愛水護水」(水を大切に) 朱素珍/金山農民画法制作作品集より

せる農民画的‘抜き’です。

画の作者の朱素珍さんは、中国政府から農民画師の称号を与えられた限られた20数名の中のお一人ですから、そんな子供っぽい表現も実はしっかり計算されたうえでのことでしょう。

休暇の計画もそわそわと夏の到来が待ち遠しいですが、私たちの流れる水のために雨にもうひと頑張りしてもらいましょう。

## ‘わりい’の原稿を募集しています

～ ‘わりい’掲載記事や活動へのコメントなどもお寄せ下さい

原則として、2月と8月を除く毎月発行の会報‘わりい’は、‘わりい’の活動報告や情報の発信と同時に、会員と‘わりい’関係の皆さんから頂いた原稿でまとめられた‘わりい’の広場と思っています。

体験された楽しい話、アジア各地で見聞した面白い話などなど自由に書いていただければと願っています。その他、‘わりい’の活動や会報への感想やご意見も紙面の許す限り掲載し、わいわいがやがや活気のある内容にしたいと願っています。手始めにホンの一

言、メール或いは葉書で気楽に送って頂いたコメント・コーナー・‘わりい’信箱(xinxiang)を設けたいと思っています。掲載文への感想や励まし、‘わりい’活動への希望など何でもOKです。

\*長文の原稿は紙面の都合上、掲載までお待ち頂くことがあります。また、作者にご了解を頂き、余儀なく手を入れたり、カットさせて頂いたりすることもありますのでご了承くださいませ。投稿宛名は、表紙右上をご覧ください。(田井)

### ようこそ、桑洼村へ

もし、自分が生まれ育った場所の地図が存在せず、見知った作物の名を過去に文字記録した人もおらず、あなたがそれに最初に取り組むことになったとしたら…… さらに食卓から掃除、洗い物まで、自分の家族の日常をいつもビデオカメラで記録されるとしたら…… これから数回に分けて、そんな奇妙な経験を引き受けてしまった、ある中国の農家のおじさんをご紹介します。

かつて村のリーダーをしていたという、おじさんの名は毛水源。彼が住む桑洼村は、起伏の激しい黄土高原に位置する延川県の典型的な農村です。約50戸、300人ほどの村人たちは、深い谷を挟んだM字状の丘陵地に住んでいます。出稼ぎに出る若者や街の学校に通う子供も多いので、普段、村にいるのは半数ほどでしょうか。棗畑が広がるこの村には、厳しい自然と折り合いをつけて、巡りゆく季節と共に歩む、どこまでもしっかりとした暮らしのかたちがあります。

### 闇夜の秧歌と「解手」

桑洼村をはじめて訪れたのは、2008年の冬、陝北への初旅の最後でした。前日の大雪のせいで、村への山道は粘土質の黄土の沼と化し、ついには凍り始めました。何度も立ち往生する車を“乗組員”総出で押し引きするのにウンザリした私は、必死に運転してくれている案内役の馮奮さんに「もういいよ。街に戻るか、他の村に行こうよう」と泣きつく始末。しかし、なぜか彼は諦めません。結局、普段2時間で着くという道のりを5時間もかけて、ようやく辿り着いた時には、既に陽が落ちていました。

停めた車のフロントライトを消し、車から降りたその瞬間……バンバン！バンバンバン!! と爆竹の音が響いたと思うと、ドラやラッパが騒々しく鳴り始め、真っ暗闇の前方から突如、色鮮やかな衣装をまとった秧歌隊が近づいてくるではありませんか！ 白いタオルを頭に巻いて、武術家のように激しく演舞する男性陣と、お手製の剪纸を貼り付けた花灯籠を両手に揺らし、優雅にス



ヤンガー  
夕暮れの村を色鮮やかな衣装をまとった秧歌隊が行く



毛家の一族

トップを踏む女性たち。輪になった隊列の中央にすくと立ち、堂々としたよく通る声で歓迎の歌を歌い出したその長老風の男性が、毛おじさんでした。

聞けば、日本からの客人をもてなそうと、急遽出稼ぎ先から村に戻り、秧歌隊を準備して私達を待っていてくれたとか。サプライズを狙った馮奮氏が、どうりで桑洼行きを諦めなかったわけです。その夜は秧歌に続いて、「説書」と呼ばれる語り部による物語りや、村人達の民謡(民謡)歌合戦が始まり、村にはとめどなく歌が響きわたりました。そう、桑洼村はここ延川県で秧歌や民謡で最も名の知れた村の一つだったのです。

話は飛びますが、「茅房」と呼ばれる窑洞のトイレは、中庭を抜けた門の外にあります。宴もたけなわ、そそくさと外に抜け出した私に気づいて、毛おじさんが懐中電灯片手に追いかけてきました。「都会から来た日本人が、



茅房の穴に落ちたら大事だ」。

初めて村にやってきた日本人の「茅房への旅」を、門の脇で見守っていたおじさんは、私が帰還するなり、言い出しました。「用足しをなんで“解手”っていうか、知ってるかい？」ポカンとする私に、毛おじさんは古の昔、強制移住の途上で、人々は用足しの時だけ互いに縛られた手の紐をほどかれた、という話をさっき見てきたかのように物語り風に話して聞かせてくれました。「わしら毛家も、恐らく明代に、無理やりこの村にやってきた。ときどき“解手”されながらね。好きな時に用を足せないなんて、想像を絶する辛さだよ。どんな言葉にも、先祖が来た道があるっていうものだ」。

満足げに顔きながら話すおじさんとの帰り道、新月の夜に見たことがないほど深い漆黒の闇が広がり、それがなぜかとても暖かく感じられたのを今も覚えています。



### 毛おじさんとその家族

次にこの村を訪れたのは、同年の夏、毛おじさんの長男の結婚式に招待されたのがきっかけでした。お嫁さんは、馮奮さんの姪っ子です。驟馬に乗ってやってくるお嫁さんを村の秧歌隊総出で迎えた盛大な結婚式については、別の機会にお話しましょう。

この時感じたのは、この村はとても「健やか」だということ。この地域には、すでに過疎化して手入れも行き届かず、立ち枯れた果樹が目立つ村も多くあるのに対し、桑洼は人々も家々も畑も、山道を自由に闊歩する家畜たちも、みな生き活きとしている、そんな印象をもちました。

そして何よりも、私が勝手に「風の谷」と名付けた谷を囲むその美しい地形に魅せられた私は、毛おじさんに頼みこんで、家の5穴ある窑洞のうちの1穴に、寄宿させてもらうことにしました。

一緒に寝泊まりするのは、末娘のチッチィです。チッチィは高校は通い始めてすぐに辞め、今は村に帰って家事手伝い中。毛おじさんと働き者の奥さんには、6人の娘と1人息子がいます。上の娘たちはすでに他村の農家や街のマントウ屋に嫁ぎ、長男夫婦は延安で自動車修理工として働いているため、普段は夫婦とチッチィ、牛一頭、猫一匹の静かな暮らしです。

チッチィは言います。「私の人生、今が一番自由。長い一生のほんの少しの間、ぼっかり空いた穴みたい。子供のときは学校に縛られ、これから数年後には、親が決

めた結婚相手の家の人間になるんだから。この村がけっこう好きなのに」。桑洼の住人は全員同じ毛姓の宗族です。特に陝北に毛姓は少ないそうで、同姓結婚はご法度。チッチィが姉達のようにこの村を離れるのは、そう遠い日ではなさそうです。

さて、子沢山の毛さん夫婦には、五十代半ばにしてもう8人の孫がいます。去年の年の瀬は、嫁いだ娘たちが家族を連れて、初めて揃って帰省しました。三輪トラクターの荷台に毛布にぐるぐる巻きにされた幼子たちと買い込んだ食材を載せて、零下15度の寒空の中、何時間もかけて彼らは戻ってきました。女性陣はおしゃべりしながら餃子作り、男たちは麻雀、子供は雪合戦……30人もの大所帯での年越しの賑やかなことと言ったら！

正月二日の朝、次々と毛家を後にする子供達の家族を見送りながら、「こんな春節、たぶんもう一生ないだろう」と呟く毛おじさんの姿がありました。この地域では嫁いだ娘は通常は夫方の家で年越しするのが習わしで、さらに学校に上がった孫たちは迫りくる受験戦争に備えねばなりません。家族みんなの“最後”だという予感が、余計賑やかな雰囲気盛り上げていたのかもしれない。



### 農民の“文化”

毛おじさんの誇りは、手塩にかけて育てた立派な棗畑と子供達です。「みな頭はよくないが、中学校を卒業させることができた。親孝行ばかりだ」と胸を張ります。

おじさん自身は、小学校卒業後、12歳から農作業に精を出してきました。村から中学に合格した8人のうち、おじさんだけが進学を諦めたといえます。当時は文化大革命の嵐が吹き荒れ、村の民営小学校の教師だった父親は職を解かれ、貧窮を打開するため武器を手に闘争に明け暮れる毎日。長男だった毛おじさんは唯一の働き手として、やむなく農業生産隊に参加します。その後、文



革時の罪で父親が10年間あまり投獄されると、その間、おじさんが労働点数を稼ぎ、母や幼い兄弟を支えました。しかし、学校に通えなかったことは今も一番の悔いとして残ります。

「子供の時から毛筆が大好きでねえ。年の瀬になると隣近所はこぞって、わしに春聯書きを頼みにきたもんだ。漢字は村の經理の仕事に必要で、独学で一字一字覚えていった。だから今も書けない字は多い。でも、そんな時は子供たちが字書を引いてくれるから安心だ」。

最近は雨の日や農閑期には、一人静かに窑洞に籠って筆をとり、手記をしたためる時間を何よりも大切にしています。

実は文革以降、桑洼村の秧歌の火は何十年も途絶えていました。今世紀に入り、民間芸術の指導者であった馮奮さんのお父さんに励まされ、毛おじさんは皆の記憶を寄せ集めて、伝統的な秧歌を復活させるべく立ちあがります。すでに消費社会に入り、人々がお金で動くようになってしまった昨今、金銭的見返りが無い趣味活動としての秧歌隊を、個人の力で組織する難しさを思い知ったと、回想します。

「学校に通っていない農民の自分には“文化”がないとこれまでずっと思ってきた。でも、農民には農民の立派な“文化”があると、馮さんに言われてやっと気づいたんだ」。秧歌を楽しそうに歌い踊り、村のお年寄りを尋ねて民謡の歌詞を記録し、農民の文化や考え方について蘊蓄を交えながら、私に懸命に教えてくれる毛おじさんには、「文化」とは何か、ものを学ぶとはどういうことかを、常に教えられています。

そんなおじさんを友人たちは、「博士生導師(博士課程の学生=わたしの指導教官)」と呼んでからかいます。恥ずかしそうに手をあげて怒った素振りをするけれど、本人はそれほど悪い気はしてなさそうです。



### 次回の予告：

#### 意味はないけど、地図を作ろう

今回は、毛おじさん自慢の棗づくりと、初めての地図づくりについてです。桑洼村での四季の暮らしをご紹介します。

#### ★丹羽朋子(にわともこ)——

東京大学大学院文化人類学研究室、博士課程在籍。中国・陝北地域の民間芸術研究の傍ら、日中の出版界をつなぐプロジェクト「一芯社図書工作室」のメンバーとして書籍や展覧会の企画に邁進中。

yī jiǎn méi

## 一 剪 梅

娃娃:詞 陳怡:曲

一.

zhēn qíng xiàng cǎo yuán guǎng kuò  
真 情 像 草 原 广 阔  
céng céng fēng yǔ bù néng zǔ gé  
层 层 风 雨 不 能 阻 隔  
zǒng yǒu yún kāi rì chū shí hòu  
总 有 云 开 日 出 时 候  
wàn zhàng yáng guāng zhào yào nǐ wǒ  
万 丈 阳 光 照 耀 你 我

二.

zhēn qíng xiàng méi huā kāi guò  
真 情 像 梅 花 开 过  
lěng lěng bīng xuě bù néng yǎn méi  
冷 冷 冰 雪 不 能 掩 没  
jiù zài zuì lěng zhī tóu zhàn fàng  
就 在 最 冷 枝 头 绽 放  
kàn jiàn chūn tiān zǒu xiàng nǐ wǒ  
看 见 春 天 走 向 你 我

三.

xuě huā piāo piāo běi fēng xiāo xiāo  
雪 花 飘 飘 北 风 萧 萧  
tiān dì yī piàn cāng máng  
天 地 一 片 苍 茫  
yī jiǎn hán méi ào lì xuě zhōng  
一 剪 寒 梅 傲 立 雪 中  
zhǐ wéi yī rén piāo xiāng  
只 为 伊 人 飘 香  
ài wǒ suǒ ài wú yuàn wú huǐ  
爱 我 所 爱 无 怨 无 悔  
cǐ qíng (cǐ qíng)  
此 情 (此 情)  
cháng liú (cháng liú) xīn jiān  
长 留 (长 留) 心 间

xīn xiāng

### 【わりい信箱】

活動へのご希望や会報の記事等へのひと言メッセージのコラムです。気軽にメールなどでお寄せ下さい。

◆今度、機会がありましたら、叶ママのお弁当講座をわりい主催で企画してください〜。絶対に、絶対に行きたいです。(でも、ブログを見る感じ、とってもお忙しいそうですね)どうかよろしく願いいたします。(M.T.)

◆「四川一人旅」、毎号楽しんでます。一緒に旅をしているようです。中国語、よくお出来になるんですね。羨ましいです。(京)

## 【‘わりい’活動報告】

### あさおサークル祭参加

2010年5月29日(土) 5月30日(日)

「あさおサークル祭」は麻生市民館利用団体を実行委員会として毎年5月第四週の週末に開催される。

‘わりい’の会は、恒例となった「TOKYO万馬・馬頭琴アンサンブル演奏会」(29日/大会議室)と、日本/農民画協会の平野理絵さんを講師とした「農民画・スライドとお話の会」(30日/視聴覚室)で参加した。

#### ◆「TOKYO万馬・馬頭琴アンサンブル演奏会」

2006年結成以来毎年馬頭琴の本場・中国内蒙古自治区及びモンゴル国の首都・ウランバートルで演奏し腕を磨いている。

今年も5月の連休を利用して、ウランバートルで開催の「国際馬頭琴フェスティバル」に参加し、コンサートマスターの西郷美炎子さんは最高賞を得て帰国したばかりだ。「万馬」メンバーの馬頭琴演奏の力量は、既に定評があり、リピーターとして参加の方を含む多数の方が会場を埋めた。

今年、‘わりい’会員のお孫さんで中学1年生の田島マユさんが、サークル祭の馬頭琴演奏会で初めて「万馬」メンバー達と演奏した。演奏曲は、チ・ボラグ氏作曲の傑作「藍色の子守歌」で、チ・ボラグ氏が、「モンゴルの子もたちよ、モンゴルの大自然・大草原に抱かれて健やかに育て」と深い祈りをこめて作曲した、5分を超える長い曲を引ききった。

また、昨年に引き続き、アンデスの民族楽器奏者の山下孝之さんが、自作のケーナ曲の独奏や、アジアの馬頭琴と南米のケーナ・洋の東西の民族楽器の合奏、シンセサイザーの演奏などで加わるとともに、馬頭琴による四重奏曲も耳に新しく、これまでにない変化に富んだ演奏会になった。



TOKYO万馬・馬頭琴アンサンブル演奏会場風景



「万馬」メンバーと一緒に馬頭琴を演奏する中学1年生の田島マユさん



アンデスの民族楽器・ケーナを演奏の山下孝之さん

#### ◆「農民画・スライドとお話の会」

農民画についての紹介の講座は、昨年10月に続いての2回目だが、今回は、講師の平野理絵さんが、今年3月、上海の金山農民画院を訪れ、新しく蒐集した作品の紹介やご自分も実際に農民画を描かれ、農民画指導の年配の女性と交わしたお話などを盛り込んでお話くださった。PCプロジェクターを使った作品の投影は、中国独特の色合いが美しく、図柄も単純化された分、生き生きとした表現で分かりやすく絵本をめくるような楽しさだった。



農民画に描かれた中国の人々の生活を説明する、日本/農民画協会の代表・平野理絵さん

スライド上映後の休憩タイムでは、‘わりい’メンバー手づくりのクッキーとお茶で、平野さんを囲み歓談したり、平野さんが新しく用意下さった農民画作品や画集を見ていただいた。

参加者は、12、3名だったが、遠方からお出掛けくださり熱心に絵に見入る方もいらっしゃって、平野さんからも、「農民画に関心を持ってお出掛けくださった方にお会いできる機会になって嬉しかった」と言って頂けた。

(報告：田井)

## カンボジアの村の暮らし (その3)

川口洋一 (NPO団体「カンボジアこどもの家」会員)

### 【難民】

1979年1月7日ベトナム軍に支援されたヘン・サムリンの部隊がカンボジアに侵攻すると、あっけなくポル・ポト政権は崩壊し、ベトナムの後援を受けた新政権とポル・ポト派、シハヌーク派、ソン・サン派の三派連合との間で内戦が始まりました。

ベトナム軍の侵攻から逃れるため、内戦の惨禍から逃れるため多くのカンボジア人が国境を越えてタイへと逃げ込みました。タイは軍隊を出動して、難民の流入を阻止する動きに出たことから、国連は難民高等弁務官事務所とタイ政府の間で難民キャンプを国境のタイ側に開設することとしました。

ポイペトと相対するタイ側の国境の街アランヤプラテートに1979年11月、カオダイン難民キャンプが設けられました。その後難民の流入は続き、タイ軍部が管理するカオダイン、サケオなどのマンモスキャンプに入ることを拒否する難民たちが作ったキャンプもありました。

それらはポル・ポト派系、シハヌーク系、ソン・サン派系に分かれていて各派の兵士や資金の供給源となっていました。これらの難民キャンプには各国の報道関係者が取材に訪れたり、ボランティア団体が支援活動を行っていました。「カンボジアこどもの家」の栗本さんもその一人でした。

### 【地雷】

内戦の間、三派連合とヘン・サムリン派両軍のせめぎ合いが続く中で、それぞれが陣地防御のために自陣の回りに対人地雷や対戦車地雷を埋めていきました。戦線が移動するたびに陣地を構築しその周りに地雷を埋設していったので、12年の内戦の間にカンボジア全土にまんべんなく地雷が散布されてしまったのです。

内戦が終わったとき、人が住み田・畑となっている土地には地雷はありませんでした。両軍の陣地として一度も使われなかった土地にも地雷はないだろうと予測できます。しかし、12年間にどこにどの様に陣地を配置したかという詳しい記録は残されていません。使える土地は手探りで確認す



ツールボンロー村周辺の様子 大きな木は切りつくされ、その後生えてきた木もまばらだ / バンテアイミエンチャイ州ツールボンロー村  
2006年9月5日 撮影：川口洋一



アンコールトム周りの木々 お寺を囲むうっそうとした森。猿などの動物が遊んでいる / カンボジア王国シアンリアプ州アンコール遺跡  
2007年9月8日 撮影：川口洋一



お猿の踊り 孤児院の男子たちがお猿の踊りを披露してくれた。今ではあまり踊られない珍しい踊りだそう / カンボジア王国シアンリアプ州シアンリアプ市  
2009年9月15日 撮影：川口洋一

るしかない状態になってしまったのです。

1992年内戦が終わり、 難民高等弁務官事務所 (UNHCR)が難民の帰還業務を始めたとき(1992年2月)、「希望地(2ヘクタール)では、収穫が得られるまでの約1年間、配給が受けられる」と発表しました。

難民となった人々が国を離れるまで暮らしていた土地は、そこに地雷がなければ他の人が移り住んで農地を耕していました。カンボジアの農村の慣習では、土地は住んでいる人、耕している人にその土地の利用権がありました。紛争の前、土地は人口に比べて十分にあって、住みたいところに住めたのです。だが今は地雷があるので、どこでも住めるといふわけには行かなくなりました。難民キャンプの多くの人々は帰っていても耕す農地がなくなっていたのです。

2ヘクタールの土地を求める人に対して、UNHCRは十分な土地を用意することはできませんでした。そこで「農業用土地がほしい人： 現在土地がないので、UNHCRが確保するまでキャンプで待ってほしい。ただし、土地は希望地とは限らず、ほかの県になる可能性が高い」と帰還計画を変更することになりました。

こうして難民キャンプにいた人たちによって現在の国境付近の村が作られたのです。村のある地域は、昔は樹木がうっそうと茂る密林であったそうです。内戦の12年間、紫檀黒檀などの高級材や大きな木は戦費の調達のために伐採され、見通しのよくなった場所には地雷が埋められました。

このあたりにはタイとの国境線になっている小川が一本あるだけなので水の便は良くありません。村では溜池を作り雨季に溜まった水を乾季に利用して作物を育てています。乾季に十分な水を確保できるわけではないので、現金収入を得るために地雷の撤去されていない森に入って木を切り薪や炭にして売っていました。

地雷の被害にあいながらも違法と知りながらも食べるために森の木を切り続け、森は今ではほとんど樹木のない草原になっています。

**地雷1～4** 現在、ふだんの生活場所からの地雷の撤去はほぼ完了している。しかし、新しく畑にされた、人があまり入らないところでは、雨季の激しい雨で土が流れた後、深く埋まっていた地雷が出てくることもあり、2000人から3000人の村で年に1人ぐらい被害にあうそうだ。まだまだ地雷と共存する暮らしが続くようである。

掲載の地雷は村で回収したもの的一部。火薬は抜いてあるので爆発はしないが、見て気持ちのいいものではない。

カンボジア王国バンテアイミエンチャイ州ツールボンロー村  
2007年9月6日 撮影：川口洋一



地雷 1



地雷 2



地雷 3



地雷 4

アヌラーダブラを後にしてポロンナルワに向いましょう。アヌラーダブラからポロンナルワまでは直線距離で約75km、バスで約3時間の移動をするのが一番効率的です。

効率よりも鉄道だと言う方は、一度、コロンボ方向に約55kmほどのマーホーまで戻って列車を乗り換え、約100kmほど走るとポロンナルワに着きます。

地図上で見ると二等辺三角形の長い方の辺を回る様な感じになります。手元に時刻表がないので正確には判りませんし、時刻表があっても日本の様にダイヤ通りに列車が運行される事は稀なので、乗り換えがスムーズにいくとは思えません。友人にも聞いてみましたが、全く時間の予想は出来ないとの事でした。そもそも、どんな必要があってそんなに面倒臭い事を思いつくのかと言いたげな様子でした。何と言われようが鉄道だと言う方で、マーホーで乗り換え時間を取れる方は、僕の大好きなヤーパフワ<sup>注</sup>)を見物に行くのも一興です。この場合はマーホーまでの帰りの足を確保しておいて下さい。

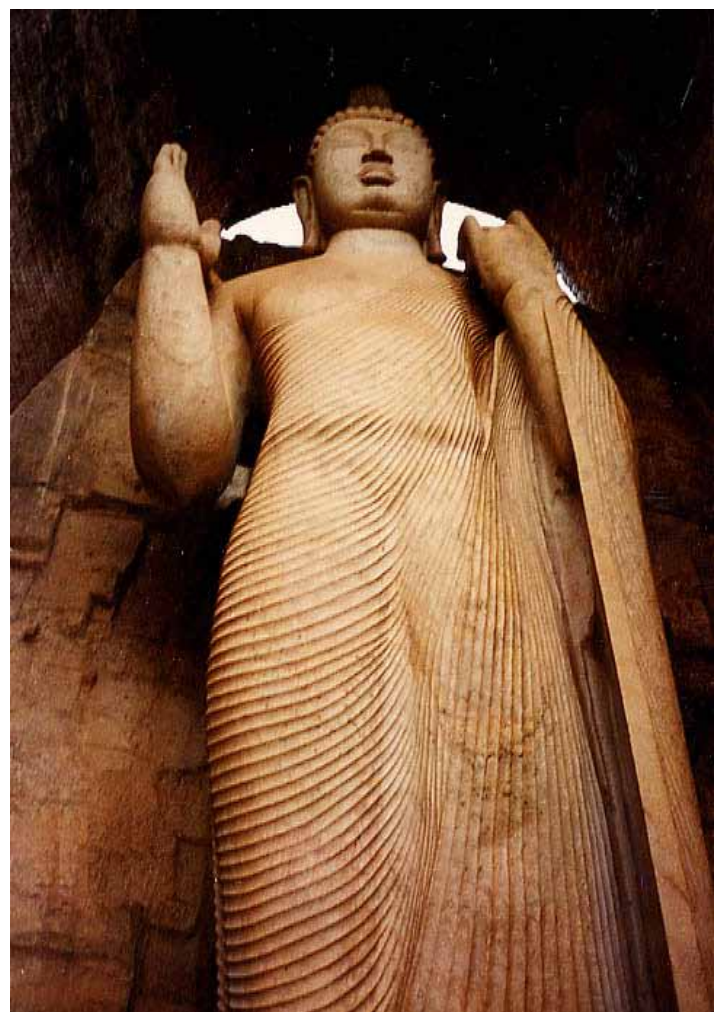
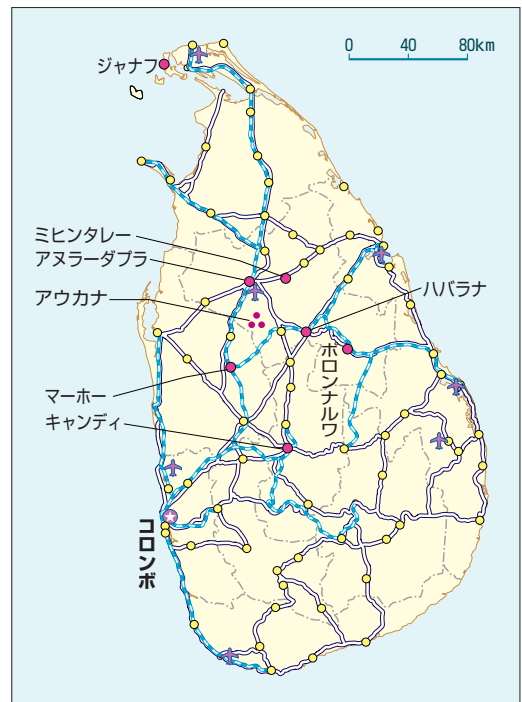
さて、本誌上ではバスを使って道中見るべき遺跡を見ながらポロンナルワへと向いましょうか。アヌラーダブラを出てジャングルの中を進み小さな町を何箇所も通過して30分もするとミヒンタレーの町に入ります。すぐに、右手に白い仏舎利塔が見えてきます。次の世界遺産候補と言われている、お釈迦様の遺髪が祀られているマハーサーヤダゴバです。

ミヒンタレーは紀元前3世紀にスリランカに仏教が最初に伝えられたといわれる聖地ですが、1934年に発掘されるまでは忘れられた存在としてジャングルの中で眠っていました。時間に余裕がある方は2～3時間で主だった物を見る事が出来るので、是非ともバスをおりて一巡りして下さい。

更に30分ほど進むとキャンディとポロンナルワへ道が分かれる交差点に出ます。交差点から少し入った処にアウカナの町があります。この小さな町にあるカラーウェワ貯水湖のそばに、これも次の世界遺産候補と言われている5世紀に建てられたアウカナ仏像があります。

岩山を彫って作られ、高さは約11.5mでスリランカ5大仏像の一つに数えられています。アウカナの仏像と貯水湖はダツセーナ王の命によって作られました。

実は、アウカナはシーギリヤ遺跡と密接な関係があります。ダツセーナ王は息子であるカーシャパ1世に王位の譲渡を迫られた時に、譲れる財産はこれだけだと言って貯水湖を指差しました。欲にくら



アウカナ仏像 仏像の纏っている衣の襞(ひだ)に注目下さい。石を彫って造られた衣ですが、衣の下に隠されている体のシルエットが透けて見えるようです。

んで怒ったカーシャパ1世は父親を湖に投げ込んで殺害してしまいました。他の兄弟と臣下からの復讐を恐れたカーシャパ1世はシーギリヤロックの頂上に籠城し、新王宮を造成したと伝えられています。

この歴史上の逸話も興味深いのですが、ここでは仏像そのものを見てもらいたいと思います。高さは約11.5mですが人間の背丈ほどの蓮座の上に立っているのも更に大きく見えます。僕が行った時には風雨による劣化を避けるために、レンガ造りの囲いで頭上まで覆われていました。現在は、周囲の眺望にそぐわないとしてレンガ造りの壁は取り払われて、1600年前に建てられ時の姿に戻されています。

スリランカ人の友人によると、風雨によって劣化するのもvery naturalなのだそうです。この辺がスリランカ人らしい考え方なのですが、世界遺産候補になるほどの仏像です。将来は観光立国を目指そうというなら、有望な観光スポットの保護には力を入れて欲しいものです。

実際にスリランカ各地に点在する石仏の中には顔の表情が判らなくなるほど風化してしまった像もあります。アウカナ仏像は僧衣の下に隠されている体の線までを表されていて、全身を覆うように彫られている僧衣の<sup>ひだ</sup>襞の緻密さはスリランカで一番美しいと言われていいます。風化してしまう前に是非訪ねて下さい。

さらに東へ30kmほど進むとハバラナの町に着きます。ハバラナは文化の三角地帯の中央にあるので、ここを拠点として各遺跡を巡る国内の巡礼者と海外からの観光客、特にヨーロッパからの観光客が多く集まります。この為に巡礼宿から設備の整ったホテルまでたくさんあるので、アヌダーブラを出てからミヒンタレーとアウカナに寄ってこられた方は此処で一泊するのも良いでしょう。

ハバラナの少し手前にあるジャングルに入る細い道を5～6km入るとリディガラ遺跡があります。約1000年前までは僧侶達の修行の場として栄えていましたが、インドからの侵攻で滅びました。19世紀初めになって再発見された遺跡です。リディガラ遺跡に行くためにはハバラナで三輪タクシーを雇うしかありませんが、時間があれば是非とも寄っていただきたい場所です。

アヌダーブラからポロンヌワに至る道筋はこのように感じで世界遺産の指定を待つばかりの素晴らしい遺跡が次々と続き、いつかスリランカ世界遺産のお遍路道として一つの大きな世界遺産にまとまるかも知れませんね。今回はポロンナルワまでの遺跡紹介になりましたが次回はポロンナルワを紹介しましょう。

(次号に続く)



リディガラの僧院跡 約1000年前まで僧侶達の修行の場だった僧院跡。現在でも発掘作業が続けられています。

#### 注：ヤーパフワ

スリランカ中央部のクルネガラと西海岸部のブッタランの間あたりにある、マーホという小さな町の近郊にある。車を使うとコロンボから120km。

スリランカの10ルピー札の裏面に「ヤーパフワのライオン」と呼ばれる石像が描かれているので知られ、石段の脇にはキャンディダンスの原形と云われているダンスシーンが彫られたレリーフがある。

遺跡の装飾は南インドとカンボジアの建築様式の影響を受けているといわれ、13世紀にわずか12間ながら、シンハラ王朝の王宮がヤーパフワにあった当時の、仏教を通じた他国との交流を偲ぶことができる。

遺跡の裏には有名なシーギリヤロックと同様のヤーパフワロックがある。

(わんりい/2006年11月号)

❖「ヤーパフワ遺跡」でヤフーを検索すると、「わんりい」掲載文面をそのまま見ることができる)



#### 使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。日本の切手、外国の切手など、周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に「わんりい」の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。



だいぶ夜も更けた頃、熱狂的な盛り上がりを見せていた宴会はお開きとなった。

酔客達が三々五々にそれぞれの部屋へと散っていくと、ガランとした宿の食堂はそれまでの騒ぎが嘘のように、本来の静けさを取り戻していた。そうだった。一瞬どこにいるのか忘れそうになっていたがここは中国の奥地、標高4000メートルにもなる山中に暮らすチベット族の小さな小さな村の中なのだ。最初のうちこそ中国人旅行者達との宴会を一緒になって楽しんでしたが、仕舞にはまるで都会の喧騒をそのまま持ち込んだような騒ぎにいささか辟易した気持ちになりかけていた私は、その静けさに気持ちが安らいだ。宿の主人は照明を絞ると、薄暗い食堂のテーブルの上に散らばった食器類を一人でカチャカチャと集めて片付けている。

先程の喧騒の余韻を引きずったまま部屋に戻る気持ちにはなれず、亜丁村の静かな夜を取り戻した食堂でもう少し過ごしていたかった。いつの間にやって来たのか、宿の主人を訪ねて来ていた近所のおじさんらしき人と二人でストーブの脇に腰掛けてポツリポツリと話をした。時おりストーブに薪をくべ、チロチロと燃える炎を眺めながら土地の人と他愛の無い話をして過ごしていると、時の流れもゆったりと速度を落したように感じられて心が和んでくる。やっぱり旅の夜はドンチャン騒ぎよりも、こんな風に過ごす方が私には合っていた。

窓の外からはまだ雨の音が聞こえていた。無駄とは判りながらも諦めきれずに時計に目が行ってしまう。時計の針は既に深夜の11時を過ぎようとしていた。山奥の小さな村にとってはずいぶん遅い時間だろう。あの少年はもう眠ってしまったかな……。せっかくの再会を果たしながら、懐かしい友人と共に過ごす機会を逸してしまった後悔に胸が痛んでいた。今日一日の出来事や少年の事を想っているうちに、ふとある考えに思い当たった私はハッとした。もしかしたら……。夕方宿を訪れた少年は、私に会いに来てくれたの？

昨夜の会話がボンヤリと甦ってきた。明日はバイクと一緒に遊びに行こう……。少年はそう言っていた。だが、このような土地での口約束など大した意味を持たない事を何度も経験している私は、後でガッカリしてしまうのを避ける為、そういう話にあまり期待は持たない事にしていたし、雑貨屋で出会った時のちょっぴり素っ気ない少年の素振りからも、昨夜の会話はその場で彼が親愛の情を表したかっただけの言葉だろうと理解していた。

どうせやんちゃ盛りの年若い青年である彼が、私なんかと遊んだって楽しい訳がない……。夕方少年が宿に姿を現わしたのも、友人と遊んでいる通りすがりに「今日は知り合いの外国人が泊まっているから、ちょっと寄っていこうぜ」という程度の軽いノリで立ち寄っただけに過ぎないように思っていたのだが、もし……。彼が昨夜の約束を果たすつもりで、友達を誘い私を訪ねてくれたのだとしたら……。昨夜の約束など無かったように他の旅行者達の仲間入りをして、少年よりそちらとの付き合いを優先している雰囲気の人に、彼は彼でちょっと失望していたのでは……。本当のところはどうだったのかは少年に聞いてみなければ判らない。

でも、もし私の思いつきが当たっていたとしたら、私は彼に対して失礼な事をしてしまったんじゃないだろうか……。「やっぱり君も普通の観光客と一緒になんだな……。」そんな風に思われてしまったのかも知れない。バイクで転んだ時に擦りむいた手のひらの痛みが、自分のバイクを壊されても温かい言葉をかけてくれた少年の優しさを思い出させて、ちょっぴり切ない気持ちになってしまった。

「さあ、もう遅いから休む事にしようか」食器の片付けを終え、一緒にストーブの前に座っていた宿の主人の言葉に促されて椅子から立ち上がった私は、食堂を出て自分の部屋に戻る前に宿の玄関のドアを開け、未練がましい気持ちで雨のそば降る亜丁村の夜の景色を眺めていた。後で戻ってくるって言ったのに……。最後に私を振り返り目で合図を送ってくれた少年の姿を思い返しながら夜の闇を見つめて、少しばかりセンチな気分浸っていたその時、「小姐、何をしているの？」と背後から声をかけられた。

振り返れば先程の宴会で妙に熱い視線を投げかけてきていた石頭だ。あ～あ。また、あなたなの？ お呼びじゃないんだけど……。せっかく乙女なセンチメンタリズムに浸っていた私は邪魔をされたくなかったが、私の気持ちなど露知らずに、石頭はすっかりほろ酔いでいい気分になっているらしい。相変わらず熱を帯びた視線で近づいてくると、更に熱を帯びた口調で言った。

「明日の亜丁自然保護区には勿論君も行くんだろ？！」

「でも、私はもう4日もあそこにおいて此処まで戻ってきたんだし……」

私が答えようとして声を出しかけると、石頭は慌てた



ように唇に人差し指を当て「しい～っ！もうみんな眠っているから外で話そう」と私をドアの外に連れ出した。だが宿の表は先程からの強い雨が降り続けている。

「だって濡れちゃうわ」

「さあ、車の中へ」

彼は自分たちの豪華な4WDのドアを開けると車の中に私をいざなった。何なの、この状況は？ウツカリしているうちにまんまと密室で二人きりにされてしまった。一人、雨のそば降る垂丁村の夜を見つめながら、少年を想ってしみじみしていたかったのに、とんだ邪魔が入ったものである。

「ねえ、明日は一緒に行くだろう？俺たちと自然保護区に行って、そのまま稻城か理塘まで一緒に車に乗って行けばいいじゃないか」

「うう～ん・・・」

今回の旅の中で、垂丁自然保護区の章は完全に終結した気持ちになっていた私だったが、実は、宴会の最中から何度も繰り返し誘われているうち私の内心は徐々に軟化しており、この時点では既に行きたい方向に80%くらい傾いていた。

何と言ったって、やはり私はあの場所に強い愛着を感じているのだ。行かれるチャンスがあるのなら何度だって行きたいし、今回訪れた湖は2回ともお天気には恵まれず、一番美しい状態での風景は見る事が出来なかった。今日これだけ雨が降って、もし明日がピーカンの快晴になったら・・・そう思うと、輝いている青い湖が脳裏をよぎった。それに加えて公共の交通機関の無い垂丁村から稻城までの道のりをどうやって戻るかは、垂丁村で途中下車した時からの一番憂慮されていた問題だ。先を急ぐ訳でもない旅をしている私にとって、彼らの熱心な誘いは私にとってもありがたい事であり、無理に断る理由は何も無いのだった。

「そうね・・・行ってもいいかな」

何度目かの熱心な誘いの言葉に少し間を置いて、私は答えた。

「本当かい!? よお～し！話は決まった！明日の朝は一緒に出発だ」

声を弾ませる石頭に

「それじゃ、話が決まったところで部屋に帰りましょよ」

と二人きりで車内にいるのがどうも息苦しい私が車から出ようとする、

「ちょっと待って。もう少し君と話したい・・・」

と石頭が私の腕を取って引き止めた。

「え、え？」

「さっきは誰と話していたの？君の知り合いかい？」

「知らない。多分近所のおじさんじゃない？」

「ええ？知らない人と話してたの？」

「だって、私は土地の人と話をするのが好きなんだから。せっかく他所の土地を訪れたのなら、その土地の人と話がしたいわ」

「じゃあ、俺とは話をしたくないの？」

彼が身を乗り出してきた

「いえ、別にそういう訳じゃ・・・」

「いや、君は俺とは話したくないんだ」

彼は大げさな素振りでは悲しげに顔をゆがめると、首を振りながらうつむいて見せた。

「そんな事無いってば！」

内心は鬱陶しい奴だと思いつつ、先程はすっかりご馳走になってしまった手前と今後も稻城まで車に乗せて貰うなどのお世話になる立場としては、やっぱりちょっとは気も使うのだ。

「本当？・・・本当かい!? じゃあ言うけど・・・今日初めて君を見た時ハッとしたのさ。君は俺の前の彼女にそっくりなんだよ。今日ここの宿に泊まる事を決めたのも君がいたからだ。・・・始めて会った時から、俺は君から目が離せなくなってしまったんだ」

ぎょえええ～・・・!! 昔の彼女に似てようが似まいが、そんな事は私に何の関係も無いし、つまり石頭はフラれた彼女が恋しいだけなんじゃ・・・? 唾然とする私にはお構い無しに、勝手に一人で盛り上がっている石頭は、身体を寄せてくると私の手を握り自分の胸に押し付けて言った。

「君を・・・好きになってもいいかい？」

ば、馬っ鹿野郎おううう～!!!! 今、私が一緒に居たいのは・・・お前じゃなあああああいいいい!!! 私の腕を引き寄せ、顔を寄せてこよよとする石頭をかわしながら私は心の中で叫んでいた。よりもよって少年の事で胸がいっぱいなこの時に、まるで悪い冗談みたいなこの展開は何なんだ～!?

「旅先で出会った外国人同士で、あなた何を言ってるの？」

「そんな事、関係無いさ！」

「大ありよ!!それに明日自然保護区に行くなら、もう早く寝なくっちゃ。宿に戻りましょ」

何の興味も無い、酔っ払いのたわ言に付き合っているのが面倒になった私は、まだふにやふにや言っている石頭に構わず車から降りた。神様にからかわれているかの様な自身の境遇には失笑するしかなかったが、この程度の事では、一旦行くと決めてしまった自然保護区に行く気持ちは揺らがない。明日こそ晴れると良いのだけど・・・

翌朝は6時に宿の食堂に集合の約束だった。

セットしておいた目覚まし時計で目を覚ました私が穴倉のような部屋から這い出して表を見ると雨は上がっていて、垂丁村は紫色の朝もやに包まれていた。幻想的な風景だ。山に行く身支度をすませて食堂に行ってみると北京軍団のメンバーも起き出してはいたものの、何だか様子はパツとしない。特に石頭をはじめ、昨夜勢い良く強い酒の杯を飲み干していた数人はグッタリと青い顔をして頭を抱え、口元を押えて見るからに具合が悪そうだ。

ははぁん・・・昨夜は人の忠告も聞かずに高所で強い酒を飲み過ぎた為、みんな高山病と二日酔いにやられてしまっているという訳だ。石頭は私の顔を見るとキマリ悪そうに小さな声で「おはよう」と言った。昨夜の事など、どうせ酔っ払いのたわ言だと思っている私にはどうという事は無かったが、石頭は私と顔を合わせるのとはとてもバツが悪そうだ。

結局、昨夜全員の荷物を担いで歩くと気炎を上げていた石頭と北京グループのリーダー、その奥さんと子供の4人は自然保護区には行かず、このまま車で稲城に直行するという事だった。私は残りの料理長と調理補助の男、そして昨夜の宴会では私の隣に座っていた、一番落ち着いた物腰のスン・シャオドンという人物の3人ともう一台の車で自然保護区に向かった。既に3度目だと言うのに、あそこに向かうのだと思うとワクワクしてくる。ややグッタリしている北京軍団の面子を尻目に、結局、一番ノリノリなのは何を隠そう私である。

空の様子はうす曇りだ。快晴は望めなさそうだが、どうやら雨の心配は無いらしい。自然保護区の入り口で北京軍団のメンバーは当然のように馬を調達したが、私は徒歩だ。往復の騎馬料金200元は、この先も続く旅を想えば少しでも節約しておきたい。私の前をトコトコと馬に跨っていく北京軍団の後をワシワシと追い駆けて歩いている私。何だか可笑しい。普通は立場が逆じゃないの？ そんな時、道に立っていた老人がニコニコしながら声をかけてきた。

「小姐!! 馬は如何かな？」

垂丁自然保護区では、入り口の管理棟で行政に管理されている馬しか営業できない事になっているので、この老人はモグリの馬方だろう。冷やかし半分に「いくら？」と聞いてみると90元と答えた。

「不要! 不要! (ブーヤオ! ブーヤオ!)」

手を振りながら通り過ぎると、値段を尋ねた事で脈ありなお客と思われたのか、老人が後ろから追い駆けてきた。

「小姐! 小姐! 幾らだったら乗るんだい?」

うーん、そうねえ・・・北京軍団は馬でトコトコと先に

行ってしまおうし、このまま洛絨牛場まで追い駆けて歩くのも結構しんどい。

「50元かな?」

「60元だよ、小姐!」

老人も商売が苦しいのか、なんなく大幅な値引き価格になったので、ここは一つ奮発して馬に乗ることにした。乗ってみればやっぱり楽だし、家老を従えたお姫様気分だ。馬方の老人は明るい性格でおかしな冗談を言っては私を笑わせ、途中までは楽しい道中だったのだが、道半ばで雲行きが怪しくなってきた。暫くすると道の先の方を伺うようにしていた老人が、「小姐! ちょっと馬から降りて。ワシから離れて歩いてくれ」と頼むので馬を降り老人と馬の少し後ろを歩いていると、前方に管理人の腕章をつけた男がいた。ははぁん、なるほど。あれに見つかったらモグリの営業がバレてしまうという訳だ。

管理人の前を通り過ぎると私は再び馬に跨ったが、老人がビクビクしながら歩いているので落ち着かない。暫く行くと再び馬を降りてくれと頼まれた。道は昨夜の雨でドロドロだ。老人はとっとこ行ってしまおうし、泥に足を取られながら追い駆けていくのも容易じゃない。何じゃ、こりゃ～!! せっかくお金を払ったのに、ちっとも楽しいぞ～!!! これでは老人に騙されたようなものだが、時折ニヤニヤしながら私を振り返り、コソコソと挙動不審な態度で道を行く翁の姿は妙に憎めなくて苦笑してしまった。

靴をドロドロにして汗をかきながら山道を登っていると、先日の自然保護区で私が何度も顔を会わせていた管理人二人が芝生の上でチベット族の少女達をはべらせて、のんびり寝そべっていた。片肘を付き、眠たげな薄目で私を見ると、「オヤ、小姐じゃないか。まだここに居たのかい?」

からかう様に声をかけて来たのを思いっきり無視して通り過ぎたが、憎悪の気持ちがこみ上げてくる。

コイツらはこんな事してて行政から給料貰ってるのか～。行政の利益の手先となる役人が、概ね鼻持ちならない奴なのはどこの国でも同じらしい。フン! 嫌な奴ら。どうせ村人には権力を傘に威張りちらし、時には賄賂なども受け取ったりしながら、のらりくらり暮らしているに違いない。先日は憧れのホーストレッキングを邪魔された逆恨みもあって、想像で勝手に憎らしいイメージを膨らませ、その怒りのエネルギーで、やけくそのようにガシガシ歩いた。

結局なんだかんだで、道のりの半分くらいは徒歩で歩いてしまった。激安価格のつもりで雇った馬は、買い物に例えればまったく安物買いの銭失いだ。今後垂丁に向かう

知人がいたら、ぜひこの教訓を伝えてあげたい。

「亜丁自然保護区では、馬に乗るなら正規品」だ。老人を睨みつけながら恨み事を言ってみたが、やっぱりニヤニヤしながら謝る老人はちょっと憎みきれなかった。一足先に洛絨牛場に到着していた北京軍団と合流すると、3人のうちスン以外の料理関連メンバーは更にグッタリとしている。出発点より標高があがった為に高山病が悪化しているらしく、そそくさと曇り空の牛場で記念写真を撮ると、このままスグに下山したいという。

ええ～!! せっかく此处まで来たのに～?

まったく先に稲城に向かった石頭達といい、こいつらといい、せっかく亜丁までやって来て、酒の飲みすぎで肝心のところは見逃してしまうなんて馬鹿みたい。ここまでやって来たらぜひ湖を目指したい私だったが、これでは行かれる訳も無い。ただ1人まともな状態のスンにだけでも、もう少しこの土地の美しさを知って欲しかっ

た私は、せめて道の最奥にある<sup>ヤンマイヨン</sup>央邁勇の麓の湿原まで行こうと説得すると、二人で道の奥を目指した。

残念ながら曇り空の中に頭を隠していた<sup>ヤンマイヨン</sup>央邁勇の全貌は望めなかったが、それでもスンは風景の美しさに感動しているようだったので、私は少しホッとした。昨日北京軍団と出会った時から、亜丁の美しさについて語り続けてきた私だ。これでちょっとは面目躍如できたに違いない。

スンは言った。

「ありがとう小姐。確かに素晴らしい景色だよ。君が居なかったら俺は絶対にここまで来られなかった。君に感謝するよ」。

この土地で知り合った中国人旅行者からこの台詞を聞くのも既に3度目だ。もうこの土地に骨をうすめてガイドになっても良いくらいじゃないか。次はいつ来られるんだろう・・・。長い長い亜丁での一週間の様々な思い出を噛み締めて、私は湿原の風景を眺めていた。 (続く)

## アフリカとの出会い (44) アフリカの日々・アフリカンフェスタ横浜 2010

アフリカンコネクション 竹田悦子

梅雨の晴れ間だった6月12と13日、横浜の赤レンガ倉庫にて「アフリカンフェスタ横浜2010」が開催された。

アフリカと日本を繋ぐ団体、人、モノ、文化などが一同に会し、それぞれの理解をより深めていこうとする催しである。私は5年ぶりにこのフェスティバルを訪れてきた。5年前と違ってすべての面で、大きくなっていった。有名人も多数参加し、ステージも大きくなり、NGOやアフリカと関わる企業のブースも増え、参加者も来場者もとても多くなっていた。アフリカ料理の屋台も数多く並び、普段はお目にかからないアフリカの料理が、当たり前のように並んでいた。現在開催中のサッカーワールドカップの影響もあり、南アフリカのブブゼラという楽器を吹き鳴らす人、太鼓の音、ダンスなど、暫くいると自分が横浜にいるのを忘れてしまう。

日本にいるアフリカの人たちも増えてきたように思う。特に日本人とアフリカ人の血を引く子供達が本当に多くなった。日本生まれのアフリカの血を引く子供達の存在は、今後の日本とアフリカの関係をどう変えていけるだろうか?そんなことを考えながら、アフリカ雑貨を売るお店やアフリカでいろいろな活動をしている団体を見て回り、屋台でケニア料理を買って食べてみた。横浜で、沢山のアフリカ人に囲まれて、アフリカ料



理を食べている自分。なんだか不思議な気分だった。

今年は初めて子供達も連れて行った。子供達は誰でもすぐ仲良くなる。スーダンやナイジェリア、カメルーンの血を引く子供達ともすぐ仲良くなって、かけっこやおしゃべりを楽しんでた。そんな姿を眺めながら、日本人、アフリカ人がお互いの垣根を越えて、人として地域で繋がり合うことが自然に出来る社会の創造を願って止まなかった。

来年もフェスタは開催される予定ですので、是非出かけて見て下さい。今年のフェスタの概要は、以下のURLで確認できます。

<http://www.africanfesta2010.com/index.html>

**特別展「誕生！中国文明」**

<http://www.tnm.jp/jp/servlet/Con?pageId=X00/>

東京国立博物館 平成館（上野公園内）

2010年7月6日（火）～9月5日（日）9：30～17：00

- ▲入館は閉館の30分前迄。但し会期中の金曜日は20：00迄、土・日・祝日は18：00迄開館
- 休館日：月曜日（ただし7月19日（月・祝）、8月16日（月）は開館、7月20日（火）は休館）
- 入場料（ ）は前売り：1500円（1300円）、大学生1200円（1000円）、高校生900円（700円）、中学生以下無料、
- 会期中関連イベント「京劇の夕べ」  
張紹成氏による京劇の解説＆「西遊記」や「三国志」の一部を上演。【出演】張紹成・馬征宏・張冠玉・于躍
  - ◆7月30日（金） 18：30～19：30
  - ◆東京国立博物館大講堂
  - ◆無料但し、「誕生！中国文明」観覧券（半券提示でも可）  
※午後4時30分から会場前で整理券を配布。

特別展「誕生！中国文明」開催記念イベント

<http://tanjochina.jp/main/event/index.html>

◆◆◆ 夢のエンタテイメント ◆◆◆

7月9日（金）13：30～16：00

文京シビックホール 大ホール <http://www.b-academy.jp/b-civichall/index.html>

- 1部：秘密「変面」と京劇「三国志」の一節を披露**  
出演：張紹成・張冠玉・于躍・馬征宏・張青恵
- 2部：「二胡と室内楽のしらべ」**  
出演：チェンミン（二胡アーティスト）  
読売日本交響楽団弦楽四重奏
- 3部：トークショー「中国文明と日本の文化を考える」**  
出演：鳳蘭・姜尚中・田原総一郎・チェンミン他  
S 4,200円 / A 3,500円 / B 3,000円（全席指定）  
※「誕生！中国文明」の観覧料を含みます。
- ◆問合せ&申込み ☎048-477-6961（中田）
- ◆主催：読売新聞社・大広

**ふれあいコンサート** 2010年7月25日 ⑩11:15～  
～ 街を、まるごとコンサート会場に！ ～

TOKYO万馬・馬頭琴アンサンブル/ケーナ演奏の山下孝之さん他 キーボード、ボサノバ弾き語りギター等いろいろ演奏

**会場Ⅰ：町田ミュージックパーク**

町田ターミナルプラザ2F「市民広場」/町田市原町田3-1-4  
JR横浜線・町田駅ターミナル口徒歩1分/ミナ隣

11:15～11:45 東京万馬馬頭琴アンサンブル【馬頭琴】  
13:30～14:00 山下孝之【ケーナ】

**会場Ⅱ：町田ターミナルロード**

町田市原町田4-3-6/「ひじかた園」隣/JR横浜線・町田駅ターミナル口徒歩2分

11:15～11:45 山下孝之【ケーナ】  
14:15～14:45 東京万馬馬頭琴アンサンブル【馬頭琴】

- ◆主催・問合せ：町田市文化・国際交流財団 ☎042-728-4300

琵琶演奏40周年記念公演

[http://www.concertnavi.com/?m=pc&a=page\\_o\\_concert&target\\_c\\_concert\\_id=10715](http://www.concertnavi.com/?m=pc&a=page_o_concert&target_c_concert_id=10715)

**「涂善祥中国琵琶の世界」**

2010年7月19日（祝） 18：30～（開場 18:00）

紀尾井小ホール（東京都千代田区紀尾井町6-5）  
料金：6,000円（全自由席）

- 出演：**涂善祥（中国琵琶）、ジョージ・ガオ（二胡）、馬平（パーカッション）、矢野留美（ソプラノ）、海老原真二（シンセサイザー）、マリ・リー（ピアノ）、松崎安里子（チェロ）
- ◆**主催：**琵琶演奏40周年記念公演「涂善祥中国琵琶の世界」実行委員会／中国上海音楽学院／東方音楽社
- ◆**お問い合わせ：**東方音楽社 TEL：052-705-3803
- ★チケットは、馬平さんがお持ちです。  
**連絡：**馬平（マーピン）090-1408-5763

**ラオス山の民・モン族「刺繍でつづるお話の世界」**

**場所：**ギャラリーカフェ・亀福 <http://kamefuku.info/>  
東京都国立市東1-14-21 グリーンライフ国立1F  
TEL/FAX：042-573-3580 国立駅南口徒歩分

**期間：**2010年7月9日（金）～13日（火）  
11：00～18：00（最終日16：00）

ラオスの山岳地帯に住むモン族。口承で語り伝えてきた世界を糸と針で色鮮やかに物語の世界をつづるタペストリーと刺繍絵本の展示とモン族の刺繍のクラフト作品の展示。ラオス・山の子ども文庫基金の安井清子さんがお久しぶりに日本に帰国して会場にいらっしやいます。

**和光大学・公開講座**

<http://www.wako.ac.jp/kaihou/event.html>

**I. レクチャーコンサート**（定員：100名）

**「薩摩琵琶と尺八の交響—現代に蘇る門付け芸能」**

〔琵琶〕後藤幸浩（薩摩琵琶演奏家）/ 〔尺八〕小濱明人（尺八・天吹演奏家）/ 〔レクチャー〕兵藤裕己（日本中世文学・芸能史、学習院大学教授）/ 〔司会〕山本ひろ子（日本宗教思想史、和光大学教授）

- 2010年7月10日（土）17:00～19:00
- 和光大学生協食堂（E棟4F） [参加] 500円

〒195-8585 町田市金井町2160 鶴川駅南口徒歩15分  
鶴川駅発和光大学行きスクールバス→和光オープンカレッジ・ばいであ前から 16：05、16：35、16：55（臨時）

※満席の可能性があります。必ず事前に問合せと申込みを。

**II. アフタヌーンコンサート**

**「中世ヨーロッパ音楽の楽しみ—聖なる歌/愛の歌」**

- 2010年7月9日 13:00開演 [参加]無料
- 和光大学E棟101教室

鶴川駅発和光大学行きスクールバス→和光オープンカレッジ・ばいであ前から 12：00、12：10、12：30

- 問合せ：和光大学企画広報課 ☎044-988-1433

**【7・8月の定例会と9月号のおたより発送予定日】** ◆定例会：7月15日（木）/ 8月9日（月）13：30～ 田井宅

◆おたより発送：8月30日（月）14:00～ 田井宅 ★8月は「わんりい」はお休みの月です。お元気でよい夏を！